

# 川柳 さいたま



春 蝉

2020年（令和2年）  
6月号（No.727）

日川協加盟

## 巻頭言

雨ニモ負ケズ風ニモ負ケズということ 願法みつる

「雨ニモ負ケズ風ニモ負ケズ」は宮澤賢治の詩である。様々な人間模様にも替え歌が適応できる。「ウイルスにも負けず禁足にも負けず・・・」とくれば新型コロナだろう。「一題目は抜けず二題目にも抜けず、句会や大会でもほとんど抜けず、丈夫な神経をもち、欲はなく決して怒らず、いつも静かに笑っている・・・自分が目立つことはせず、仲間の川柳振りをすべて寛容し・・・誉められもせず虚仮にもされず、そういう川柳を私は愉しみたい」と言う柳人が、現在居られるだろうか。自分はそう在りたい。そんな呑気な構えを願っていた老柳人に、今回のコロナ騒ぎはとんでもない影響を与えてくれた。全ての社会活動が封じられたからである。川柳という社会活動も。個人だけではない。吟社・結社といい、大会・句会・勉強会といい、総会・役員会・会議といい各種の会同が不可となった。機関誌の発行や活動も、印刷所を含めて瘦せ細ってきた。四季の移ろいを仙人的に傍観するのみだ。賢治の宗教的観点から付度すれば、現今は異常拡張した文明であり、原始的な時代へ回帰の警鐘であると指摘するかも知れない。やがてはマスクなど不要な時節も来る。そしていつか川柳活動が再開されたら、好事家はそろそろりと句を吐き出すことだろう。そしてニヤリと曰く。『雨ニモ負ケズ風ニモ負ケズ、川柳ヲ愉シミタイ。』

日日是好 願法みつる

風吹いてDNAが延び縮む

吐く息も自粛せよとの国の策

愛ぬくめ幅一間を差し向かう

日の本の祭りが消えた異の世界

ピカソ・ダリ悪魔天使の目の交差